

魔法の食べ物

母のくれた食べ物の思い出は、母の記憶と一緒に私には薄い。小学校2年の春に母を亡くしたからである。しかし、母の忘れられない『食べ物』といえ、いつも思い浮かんでくるものがある。それはくすりだった。

私は悪さばかりする子どもだった。そのため中学校の教師をしていた父に、日に何発もげんこつを食らった。襖に手製の手裏剣で穴を開けては一発。トタン屋根を忍者さながら這って歩いては一発。隣家の畑からイチゴがなくなつたと聞いてはまた一発。まことに忙しく日に三発は下らなかつたから、一年中着ていた服の袖は涙と鼻水でぐちよぐちよになり、それをお日様で乾かしてテカテカにし、悪友たちとどっちが光っているか競つたものだった。「少々落ち着きがないようです」などと書かれた通信簿をもらつてきた日の父の噴火たるや、正座した私は固まつたまま石になった。それでも悪さは収まらない。そうゆうわたしにとって何より母が逃げ場所だった。

そんな私も時々風邪をひいた。注射も薬も大嫌いだった。当時の粉薬の量は子どもには多かつた。オブラートもすぐの

どに詰まった。

「薬は苦<sup>にげ</sup>えもんだ。んだがら薬なんだ」

子どもには分らない説教をして、飲まないでいるとまた父のげんこが飛んできた。涙をポロポロこぼしながら父の前で薬を飲まされた。

そんなある日の晩に母は私の手を引いて、母屋から離れた納屋へ連れて行った。薄暗い裸電球の下で、不思議そうに私が見上げていると、母の目がきらきら輝いていた。そして、小さな包みの紙片を口に当てて見せた。それから、中のものを口に含んで、

「あつ、甘<sup>あめ</sup>えー！」

小さく叫んで、ニコニコしている。

「おらもうっ」

私はすぐ母にすがりついた。

母が私にくれたのは、灰色の苦い色が消えるほど砂糖で真っ白にしたくすりだった。